

〈翻訳〉

クラウス・ロート 現代ヨーロッパの国際コミュニケーションに おける〈隣人〉と〈隣国〉

「近隣 ― ドイツ人・ポーランド人・チェコ人のあいだの
インターカルチュラル・コミュニケーション」(2001) への序説

(訳) 河野 眞

エスニック文化に規定された国民国家の理念の定礎者として知られる
ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー(1744-1803)は、ドイツの幾つかの
隣国とその諸文化についても何度か言及した。それは特にドイツの東と北
に位置する国々についてであった。ヘルダーとその同時代人ゲーテ(1749-
1832)にとって重要とおもえたのは、ヨーロッパの諸民族が、特にその民族
詩心*の所産を通じてたがいによりよく知り合い、理解し合うことであつ
た¹。しかし隣り合う諸民族とその文化的表現への早い時期の関心を概観
しておどろくのは、隣人や隣国という見方が文化研究のなかでは大きな位
置を占めていなかったことである。それどころか、このテーマへの十分な
文献、特に基本理論にかんする文献を見出すことすらむずかしい²。同じ
ことは、隣人という専門領域をする歴史研究や社会学についてもあてはま
る。たしかに、〈文化関係〉や〈文化接触〉をめぐる研究がありはする³。
同じく、〈村の隣人組*〉⁴や〈都会の隣人関係〉⁵についても研究がなさ

1 参照, Herder, *Völklied* (*Stimmen der Völker in Liedern*). Leipzig 1778/79. またゲーテによるヨー
ロッパ諸国の民間バラードの翻訳。

2 Thomas Hauschild (1987: 143)はエスノグラフィーについて、〈ヨーロッパ外の社会にあって
は・・・空間的共生の社会的な諸側面には・・・大きな意味があたえられていない〉ことを
指摘した。すなわち隣人関係は、〈実際に力をもっているものである親類全体〉の背後に退
いてしまう。

3 参照, Heilfurth 1967; *Kontakte und Grenzen* 1969; Greverus 1988; Peuckert 1954; Schulte 1954; Schwarz
1967.

4 たえば次を参照, Baumgarten 1967; Dobrobolska 1983; Honvehlmann 1990; Kramer 1952, 1954;
Krins 1952; Zender 1960; Szabo 1977/78.

5 たえば次を参照, Berteles 1990; Bulmer 1986; Engelhard 1985; Garrioch 1983; Schubert 1977;
Schuster 1987; Schwering 1970; White 1987; Wireman 1984.

れていないわけではない。たとえば、＜ドイツとチェコの隣人関係＞を歴史的に振り返るといった種類である⁶。それに集団と個体とのあいだの相互行動にかんするエスノロジーの理論⁷も見受けられる。しかし、隣人と隣人関係が独自の社会文化的な関係として、それに特化したテーマがとりあげられることは稀である⁸。百科事典や専門事典や入門書でも、＜隣人＞となると、ほとんど専ら、村あるいは町における具体的な居住者としての隣人が取り上げられるにすぎない⁹。民俗学においてこのテーマへの関心が、全体としては小さいことをよく示すのは、1948年にヴィル＝エーリヒ・ポイカートが編集刊行した年刊誌『隣人 — 比較民俗学誌』*が3号までしか出ずに、1962年には廃刊となった事実であろう。

隣人と隣人関係に関する包括的な理論への関心が、こうして希薄であるのは、なぜであろうか。その背景にあるのは次のような事実である。

- (1) この現象は普遍的であり、学校の教室で隣どうしの席と住宅のお隣から隣国の国民にいたるまで社会と政治のなかでの大きな意味をもっている。
- (2) たいていの相互交流と相互関係、またたいていの緊張・確執・戦争は隣り合う者とかがわっている。
- (3) 隣どうしは非常に長い歴史的経験であるのが通例であり、きわめて多様なステレオタイプ化した観念や先入観や敵対イメージは隣どうしとかかわっており¹⁰。実際、ヨーロッパほど、狭い空間にかくも多くの民族が隣どうしとなってきた大陸は他にはあるまい。

エスニシティに関係した学問として、フォルクスクンデ(Volkskunde)とフェルカーンデ(Völkerekunde)のあいだの歴史的に条件づけられた任務分担自体は、説明がつくものとなっている。フォルクスクンデ(民俗学)は、18世紀のはじめに始まって以来、＜自己のもの＞すなわち自己のナシヨナ

6 たとえば次を参照, *Deutsche und Tschechen* 1971; Lemberg 1971; Ploch 1988; Sirovatka 1969.

7 たとえば次を参照.

8 やや踏み込んだ取り組みを挙げるとすれば、そのテーマによる論集 (Grathoff & Kloskowska 1994) 所収の次の論者の成果であろう。参照, Richard Grathoff, Steven Vaitkus, Kolyo Koev.

9 参照, Heberle 1969; Beth 1934/35; Weiss 1978, S.79, 163, 305.; Beiti 1974, S.585.; Hauschild 1987, S. 143f.; Rosenbaum 1999.

10 参照, Gerndt 1988, Bausinger 1961, Nußbeck 1994, Roth 1998; またヴァンダー (Wander 1964) は隣人・隣人関係にかかわる諺を約200種類挙げている; また次も参照, Mucha 2000: 227.

ルな文化にかかわる学問と解され、他方、フェルカークンデ(民族学)は、〈まったく別の〉文化、それも遠くよそのエキゾチックな(特に植民地)諸民族にかかわってきた(参照, Roth 1995)。この二分モデルのなかでは、隣の諸文化を〈近いよその〉あるいは〈よそよそしい近い存在〉とする余地はなかった。それどころか、自己の同質なナショナル・カルチャーとナショナルな言語の構成と正当化を後押しする営為のなかで、ほとんどの国においてフォルクスクンデは、それらから目をそらし、また自己の文化のアイデンティティを規定する上での劣った比較のデータとして利用してきた。かかる傾向の頂点は、20世紀の〈言語島民俗学〉で、〈純粋な〉自己文化が〈文化をもたない〉隣人たちの海に囲まれているという見方を押し出したのだった(参照, Weber-Kellermann 1967; Schenk 1994)。それに対して、自己をヨーロッパ・エスノロジーとみなす現今のフォルクスクンデ(民俗学)にとっては、隣り合う諸民族とその文化との取り組みが研究の中心に入ってきた。なお敷衍するなら、同じことは、インターカルチュラル・コミュニケーションにもあてはまる。従来それは、隣の諸民族のメンバーのあいだの個人を超えるインターアクションという特殊性について、理論的にも実地においても十分に開拓されていなかった。

II

この問題に、先ず概念的にアプローチを試みよう。〈隣人〉最初に来る見方は〈よその〉である。すなわち自己の位相の外にある何者かである。しかし〈よその〉という概念規程がすでに示すように、〈隣人〉(Nachbar)と〈よその〉(Fremder)の単純な重ね合わせは、適切ではない。シェフター(Schäffter 1991)によれば、〈よその〉の概念がきわめて多面的で、よそのらしさ、まだ知られていないこと、識知できないこと、不気味などの意味を包含するが、これらは必ずしも隣人に特有というわけでもない。隣人もよそのの意味をもつが、それは外にあるもの、すなわち〈空間的に規定された境界の彼方にあること〉の意味においてである(Maletzke 1996: 30)。そのかぎりでは、隣人は他の存在、アウトサイダーであり、それは〈固有の〉と規定される社会的グループ、すなわち〈我々グループ〉¹¹には属さない存在という意味である。しかし他面では、それは

全きよそののではなく、近しくなった存在でもある。隣人は、また遠いよそのとは違って、逃れることができない存在という点で我々のグループと重なり、また社会的に別の存在と共通する点においてよそのともかさなる。ちなみに“eigen - fremd”(身内vsよその)と“zuhaus - draußen”(内vs外)の単純な対立図式は、それゆえ短絡である。むしろ隣人の特殊な問題性は、隣人を中間媒介的・社会的カテゴリーとして理解するとき射程に入ってくる。すなわち近い存在・知った存在・親しんだ存在・親しみつつある存在としての身内(das Eigene)とまったく別の存在・遠い存在・エキゾチックな魅力をもつもの・脅かすものとしてのよそのもの(das Fremde)との中間媒介者である。境に接するものとして、すなわち“closest Other outside of the milieu”(Grathoff 1994: 19)として、隣人は、慣れた他者あるいはよそのものであって慣れた存在であり、それゆえ一面では知ったものであり、他面では自己の位相の境に位置を占めているがゆえに脅かす存在でもある。したがって隣人の位置は、すこぶるすこぶるアムビヴァレントである。よそのもののこの<二つの顔>(Maletzke 1996: 31)は隣人において特に顕著にあらわれる。すなわち一面では助力者・友人、他面では嫉妬深い存在・敵というその矛盾したイメージであり、またそれはおびただしい数の諺において表現されてもいる(Wander 1964)。

この<他者>(der Andere)は、もちろん自己のグループに属するか、それとも他の大グループに属するかどちらかで(またそのいずれであるかには重要な差異が)あるが、ここでグループと言うのは、社会経済的な性格であることが多く、そのほかでは宗教的、言語的、あるいはエスニックに規定されるものである場合もみられる。言い換えれば、隣人関係は、イントラ・エスニック内的(intra-ethnisch)やイントラ宗派内的(intra-konfessionell)でもあれば、またインター・エスニック間的(interethnisch)やインター宗派間的(interkonfessionell)でもあり得よう。ちなみに後者については、特に南東ヨーロッパの事例がよく調査されてきた¹²。

11 我々グループ(Wir-Gruppe)とは、先ず家族、血族(Sippe)と親類(Hauschild 1987, Szabo 1977/78)、次いで町・村体、エスニックのあるいは地域的に同じ集団、そして19世紀以来たかまってきた国民(Nation)である。

12 ルーマニアのインター・エスニック共存については次を参照, Weber-Kellermann 1967; Schenk

隣人は、所与の他者、あるいはゲオルク・ジンメル¹³の命題くずっとそこいたよそ者〉のヴァリエーションであり、人が折り合うしかない存在である。それゆえ隣人関係とは、かかるよそ者との出会いの特殊性の著しいものであるが、この点でその二番目の重要な性格が示唆される。それが必然的に時間の次元をもつことである。すなわち隣人関係には、ある種の持続性がつきものだからである。住民としての隣人なら数年や数十年が通常であり、隣りあう民族なら数世紀を超えることが多く、これらの時間を通じて幅広い経験が相互にたまってゆく¹³。それだけでなく、付き合い方において特定の形態がかたちづくられる。

しかし隣人関係は、社会的次元と時間的次元だけでなく、強度に空間的次元をも伴っている。隣人 (Der Nachbar) は、語源的には空間的な近さであるが、空間的な近さはそれだけでは必然的に隣人関係を獲得するというものではない(参照, Grekova 1994)。もちろん空間的な近さのありようもまた多様である。具体的な場合には、それは、地所や家屋あるいは住宅が直接的に空間的に接している状況を指すことができる。それはまた、都市の区画や、地域が接していることを意味することもできる。あるいは、より抽象的には、すべての民族あるいはすべての国家の接し合う関係をも指ししめす。ここにあっては、空間的な近さと言ってもあきらかにまったく違った種類があり、それとともに近隣には様々な形態があるため、これまで日常生活と学問的なディスカッションにおいてもちいられてきた従来の〈隣人〉と〈近隣〉の諸概念を空間次元から区別することには意味があるであろう。隣人の空間的な遠近は、とりもおさず、多種多様な社会的関係を規定する。つまり、エスニック、言語的、あるいは宗教的な相違の面においてである。のみならず、空間的な差異は、また人間の知覚と相互作用の構造にも重なっていると思われる。

III.

以上の考察に照らしつつ、以下では、空間的な平面について区分を試み

1973, 1994.; また宗教・宗派に関わる隣人関係については次を参照, Kramer 1969; Filipovic 1960; Georgieva 1999; Telbizova-Sack 2000; Liszka 1996.

13 予備経験 (Vorerfahrung) や予備知識 (Vorwissen) については、後に詳しく検討する。

る。すなわち、隣人関係や文化的異質性がそれぞれの他者にとって意味をもつ場としての4種類の空間的平面である。

- (1) 直接的な住まいの野における最も基底のかつ具体的な平面（すなわち住家屋という最もしたしんでいる狭い領域）における近隣：ここで言うのは、境界を接し合う地所や住居・住家屋の隣人、したがってその日常の活動（住宅や庭の手入れや騒音の臭気への対策）をじかに知ることができる隣人である。そこではまた日常的な相互のかかわりもみとめられる（たとえば集合住宅の階段で顔を合わせたり、垣根越しに話をしたり、隣どうしの助け合いなどである）。しかしまた日常的に接触しているために摩擦も起きる（たとえば地境の争いや、仕切りを越えた枝の伸びや、騒音被害については次の文献を参照：Müller-Andritzky 1988; Bergmann 1992）。民俗学の研究では、近隣関係は非常に公的な性格をもつことがあるが、それは相互の責任にもとづくからでもある（たとえばミュンスターラントの調査例¹⁴を参照）。しかしそれと並行して非公的で自発的でもあり得る（大都会ではその事例が多い¹⁵）。のみならず隣人は、毎日並びあって暮らし、あるいは並びあって働いている経験の幾分かを常に駆使して、そこから特定のたがいの付き合いをめぐるルーティーンを培っている（たとえば挨拶のしかた）。

住宅の隣人が＜自分の＞大グループに属するのではなく、他のエスニック的・言語的あるいは宗教的グループのメンバーであるときには、その疎ましくさせる生活のありかたによって、自分たちのアイデンティティにとって邪魔者あるいは問題児として知覚されることがある。しかしその隣人は、親しめる他者として、自分たちの生活世界に取り入れてもよい部分になることもできる。それを保証するために、（インター・エスニック研究が教えるところでは）多くの場合、付き合いや摩擦の回避・調整のための特殊な形態が作られてきた。そうしたインターエスニックな近隣共存の事例がみられた（今もみられる）のは南東ヨーロッパであるが¹⁶、もちろんそこに限られず、チェコスロヴァキアやポーランド

14 参照, Krins 1952; Honvehlmann 1990.

15 参照, Bertele 1990; Engelhard 1986; Skalníkova 1969; Schilling 1997.

16 注12のほか次を参照, Dobrowolska 1983; Juchum 1970; Rhode 1981; Schenk 1973, 1987; Klusch 1987; Weber 1981; Roth 1999a.

におけるドイツ人との共生もみとめられる¹⁷。多様なエスニーのかかる共存は、ローカルな社会関係に影響されるだけでなく、地域、またナショナルな政治的な所産によっても強く影響される。たとえばボスニアの戦乱*やコソボの紛争*が示したのは、隣人が殺人者へと変貌する実例であった¹⁸。

- (2) 小都会や村にあっては、町村体ないしは町村体内の区画（〔訳注〕町・丁など）という平面上では、住生活の近隣と近隣一般は移行しあう関係にあるとは言え、これらのやや拡大された住分野としての近隣をそれだけ切り離して観察することには少なからず意味がある。日常の社会的行動や日常経験にあってのこの重要な空間は、多くの言語において、それを言い表す独自の言い方がある（英語 neighborhood, quartier 独語 Viertel トルコ語 mahalle）。ここでは、近隣と近隣関係はすでにいくぶん抽象的で特定の人間からはなれたものとなっており、それゆえそれは違った機能をもつ。近隣を規定するにあたっては社会的同質性への傾斜が一般的で、また社会的同質性はとは、親しみや保護への願望にたいして行為の確かさやアイデンティティを提供してくれるテリトリー（Greverus 1969）を土台にしている。エスニー的には同質な町村体にあっては、近隣はほとんど常に社会経済的な基準にそって形成されるが、エスニーが混在している町村体では、近隣形成の基準は、エスニシティや言語あるいは宗教であることが非常に多い。これは住まいの近隣が現実（あるいは恐れとして）かき乱されることには抵抗力が弱いためであろう。その結果おきるのは、社会的・空間的な隔離を“ethnic neighborhoods”として設けることで、つまりエスニックな居住区あるいはゲットーである。これについては、特に北米の幾つかの大都市の事例について研究がなされている¹⁹。そうした区画のなかでは、それはそれで、日常生活の大部分、そしてそれとともに日常的な近隣関係が反省されるのである。緊張や衝

17 参照, Klosek 1994; Niendorf 1997; Schroubek 1983.

18 参照, Bax 2000: 18f.; Ash 1999. しかし『戦争に臨む隣人たち』（Halpern & Kideckel, Neighbors at War, 2000）に近隣の問題が扱われていない。グランディ（Grandits 2000）は、争いあう〈昔の仲間〉が戦争し合うことに言及してはいるが、一般的な意味にとどまっている。

19 参照, Dorson 1971; Wireman 1984; Bulmer 1986; White 1987.

突が発生するとすれば、境界を接する他のエニシティの隣人あるいはマイノリティとのあいだにおいてである。そうした衝突を回避したり調停したりするには、マルチ・エスニックな国家の場合、特殊な戦略が必要であり、またそうした戦略が発達してきた²⁰。

- (3) 近隣は、住んでいる場所という親しい空間を超えて、より大きな接触空間、つまり隣接する村や町、あるいは隣接する地域へと関係してゆく。地域の平面にひろがるかかる近隣は抽象的であるが、これはまたさらに拡大された経験の空間へと関係してゆく。それは、前工業時代には大部分の人々にとってはまだ比較的狭く、したがってそこには距離感をはたraitていた。それはたとえば地名の茶化し*として表現された隣村への揶揄などのかたちをとった。しかもそれらにおいては、隣村が近ければ近いほど、からかい方は攻撃的になる傾向がみとめられる(Bausinger 1961)。あるいは、〈となりの部族*〉をめぐる無数なまでのステレオタイプ・イメージやウィットとなった(参照, Röhrich 1977: 249-275)。やがて新しい交通手段によって獲得された流動性が隣人との圏をもひろげ、逆に今日までに、よその村・地域・地方・郡・州とそこに住む人を隣人へ変えてしまったが、これは19世紀に進行した〈地平の解消〉(Bausinger 1986: 63-75)の副次的な効果にはかならなかった。かかる隣接する単位とその住民との関係は、良き隣人らしい関係よりも、ライヴァル意識や敵意によってあきらかになることの方が多いように思われる。事例を挙げるなら、フランケン人とバイエルン人の関係、あるいはバイエルン人とプロイセン人の関係であり、また1990年のドイツ再統一の後では旧・東独人と旧・西独人の関係である²¹。

この関係では、他のエスニシティや宗派あるいは言語の住民が暮らしている国境の隣人地や隣人地域は、特別の意味をもつことは確かであろう。近代以前の国家、特に東ヨーロッパの歴史的な多民族国家では、インター・エスニックなこの種の共存が問題をもたないのが通常であった²²。そうし

20 参照, Kriesberg 1998; Weiner 1998; Roth 1999a; Tepavicev 1999.

21 参照, Althaus 1996; Ensel 1993; Hartmann 1990; Roth 1999.

22 ハブスブルク帝国やオスマン帝国やロシア帝国では、何世紀にわたって民族・言語・宗教・

た諸国家のなかでは、多様なエスニーあるいは多様な言語のグループ、また彼らの地域が原則的には同格で並んでいた。そのため混合地域（たとえばシレジア*やジーベンビュルゲン*）では、時間とともに、インターエスニックな近隣関係がかたちづくることができた。19世紀と20世紀初めに形成された国民国家がはじめて、同格の隣人から〈特権を持つ〉国家担当民族と（低位とされた）マイノリティの区分をなしたことは、よく指摘される通りである（参照, Heckmann 1992）。近代の（ヘルダーの意味での）国民国家は、共通のエスニシティ・言語・文化を規定し、同質性をめざすために、別の言語・宗教・エスニーあるいは文化ともつ隣人は、勢い、よその単位となっていく。隣人が、隣国と同じ言語あるいは文化をもち、国境に住むときには、隣人は、おそろしい〈第五列〉とみなされることも少なくなかった²³。

- (4) これによって、近隣の4番目の種類に言及したことにもなる。すなわち、国家の平面である。近代の国民国家は、内側に向かう同質性を志向し、外とは意識的に違ったものとして自己を断ち切って区分するので、隣国との関わりは常に問題をはらむことになった。近隣とは他の国家の領土であるところのものである。その領土に向けて民族統一主義の要求がおこなわれるとともに、領土である自国のなかにいるマイノリティは隣接する他の領土からやってきた存在となる²⁴。しかも領土とはアイデンティティ化に奉仕するものである。すなわちそこで起きるのは自己の限定で

文化の近隣共存の構造があったが、だからと言って、それらが、それらの諸帝国から成立した今日の国民国家にも引き写すことができるわけではない（参照, Roth 1999a）。・・・

23 この〈第五列〉（fünfte Kolonne）として危惧が感得される隣人はヨーロッパのなかでも決して少なくない。例を挙げれば次のような隣人である。フィンランドのなかのスウェーデン人、ドイツのシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州のなかのデンマーク人、逆にデンマークのなかのドイツ人、同じくポーランドやチェコやフランスのなかのドイツ人（参照, Ritter 1989）。南チロール人（[訳者補記] 南チロールは第一次世界大戦後、もとはオーストリア帝国のチロール州であったが、その南域が第一次世界大戦後、イタリア領となり、そこはオーストリア系すなわちドイツ系住民が多い）、ウクライナのなかのポーランド人、ハンガリーのなかのスロヴァキア人、スロヴァキア・旧ユーゴ・ルーマニアのなかのハンガリー人、旧ユーゴおよびマケドニアのなかのアルバニア人、ギリシアのなかの〈スラブ愛国主義〉、ギリシア北部とブルガリアのなかのトルコ人。

24 ポーランドにとっては、（ユダヤ人、ロマ人、ロシア人以外の）すべてのマイノリティは、同時に隣接する国民国家の隣人でもある。ドイツ人、リトアニア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、スロヴァキア人、チェコ人である（Feldmann 2000, S.42）。

ある。これには、ヨーロッパの異なった3つの隅から例をあげるにとどめよう。フィンランド人とは、19世紀には、スウェーデンではないこと、あるいはロシア人ではないことを指していた。ドイツ人とは、フランス人ではないことであり、同様にギリシア人やブルガリア人とは<トルコ人ではない>こととほぼ同義であった。かかる明確な境界の線引きへの希求や、新たに擡頭したヘゲモニーと領土の枠組み、また多民族国家の<不当な分割>に起因する復讐心は、19世紀と20世紀初めを通じて、新たな近隣諸国間の数多くの敵対関係を発生させ、時には軍隊がぶつかり合う戦争としても爆発した。そのドラスティックな事例はヨーロッパでも異質なものが集積するバルカン半島であり、そこでは文化・国家の原理を放り込んだことが(Gellner 1996: 115)、近隣者どうしの数多くの衝突に発展した。

それとともに国民国家にとって、隣人と隣国は、特に国境が危ういとみえるや、絶え間ない刺激となってきた。境界、より厳密には境界地域は、それゆえ19世紀以来、常にこれらの厄介な国家間の厄介な近隣関係の焦点であった。特に、国境の彼方に、自分たちと同じ言語と文化の人々がマイノリティとなっているときには、そうであった。ちなみに、国民国家が、隣国のなかの<自分たちの>マイノリティに責任を感じるのが、今日にいたるまでヨーロッパの政治の不文律となっている。ポーランドやチェコ共和国に存在するドイツ人マイノリティ、またチェコの東に隣接する国々のなかのチェコ人マイノリティなどが、そのめざましい事例である。

国境地域は、研究が示しているように、事実としてはアムビヴァレントな方向性と帰属性をもった空間であることが多い。そこは二重文化と二重アイデンティティの空間でもある。あるいは自己アイデンティティの空間であっても、国民国家の介入から免れた空間²⁵であるが、また中欧東域や南東ヨーロッパで20世紀にそうであったように、国民国家の国境が多くのある場所ですらされることによって問題性が高まる場所でもあ

25 マイノリティと国境地域の問題については次を参照, Ritter 1989; Babinski 1996; Kantor 1996; Klosek 1994, 1999; Olszewski 1998; Ploch 1988; Rusek 1998; Rösler 1999; Cerqui 1999; Svasek 2000; Mucha 2000.

る。最近では1989年から90年への年替わりに起きたチェコスロヴァキアとユーゴの解体がその事例である（Grimm 1998）。隣人に対する一般的に無関心は、部分的には、かかる国民国家的な関心から説明できるかも知れない。

なおここで言及すべきは、特に小規模の諸民族にかかわる近隣関係、すなわち隣人の国籍の選択である。精神的・文化的あるいは政治的にいけば隣接関係にあるといった、シンボリックで理念的な関係がある。それは〈最も身近な隣人〉、隣人のなかの隣人と言ってもよく、間接的な隣人よりもずっと友好的であると評されることが多い。たとえばポーランド人は、境を接していない隣人（フランス人、スウェーデン人、オーストリア人、ハンガリー人）にくらべて、じかに接している隣人を、それがどの民族であるかにかかわらずより低く価値づける。逆に言えば、最も高い価値をもって見られるのは、ずっと離れたイタリア人であり、またアメリカ人である（Feldmann 2000: 46, CBOSの世論調査1996による）。東ヨーロッパや南東ヨーロッパにとって、どこを隣人として選ぶかにはまた別の意味合いがある。つまり、模範あるいは標識をどこにもとめるか²⁶、である。

I.

以上では、〈隣人〉と〈近隣〉を空間的・社会的基準に沿って区分した。となると、次には近隣関係の質についても、より詳しく解明する必要がある。その際ここでは、国民国家の近隣という水準に的をしばろうと思う。そこでは、興味深い諸問題が特に示唆に富んだかたちで浮かび上がるからである。諸民族あるいは諸国家にとって、近隣は決して空いた空間ではなく、緊張をはらんだ野である。緊張は、諸民族の歴史的に相対してきた経験や諸国家の政治的な利害・野心からだけ生まれるのではなく、隣人

26 たとえばルーマニアやポーランドにとってはフランスが指標になろうし、またブルガリアにとってはドイツがやはり指標的である。20世紀以後は、多くの国々ではアメリカがそうした機能を役割を果たしているところがある。しかし、エリートと一般民衆では模範も見定めに違いがあることもめずらしくない。ポーランドやギリシアのエリートはフランスに模範を見るが、他方、〈庶民〉（*einfaches Volk*）はプラグマチックな見方をし、そこからドイツにその性格をみとめることがある（たとえば本書所収の次の論考を参照, Cyrus, Swiatkowski, Trojan）。

どうしが対等ではないのがほとんど常である事実からも発生する。隣人のあいだには、大きさや力、経済力や政治力、さらに言語や文化の力によって、差異が存する。それゆえ、隣人である諸民族の関係は、ほとんどの場合、優勢と劣勢の関係でもある。あるいは言い方を変えると、多少ともヘゲモニーがかかわってくる。歴史的にそうであるとともに、現今のEUにおいてもそれはあてはまる²⁷。

等しくはない諸民族や諸国家の近隣は、それゆえ常に、価値づけをはらんだ近隣となる。ダヴィデはゴリアテに対峙するわけである。つまり＜大國の尊大な大國＞や＜植民地への姿勢＞に対するに＜小國のコムプレックス＞である (Woycicki 1999: 103f.; Feldmann 2000: 109)。中欧東部では、弱者が強力な隣国に圧迫されていると感じることが多い²⁸。また貧しい者が、豊かな国の経済力の前に無力を感じている。さらに＜少数言語＞や＜小文化＞の目には、自分たちが、隣接する＜大言語＞や＜大文化＞に支配されていると映る。18、19世紀には、これらの差異は、進化論を背景にしたメタファーとして＜東西の落差＞といった表現をとった。すなわち、フランスとイギリスが最も発達した国であり、その隣人は、遠ざかるにつれて、＜まだ文明化されて＞とか、取り残されたとみなされた (Baring 1997)。かかる＜文化落差＞の最終点となるのは、＜アジア的なロシア＞や＜バルカン＞であった。とりわけ後者は、西ヨーロッパにとって、＜意味深い他者＞の役割を負っていた (Todorova 1999)。壮大で讃嘆をさそう隣国に対するに低く評価づけられ見下される隣人であり、強く恐ろしい隣国に対するに無害でちっぽけな隣人である。かかる差異を、特に＜小さな国々＞の人々は常に意識している。今日のポスト社会主義という変化のなかでも、それがみとめられる。今度もまたモデル（に加えてマネー）はすぐれた西の隣国からやって来るのである。

27 ヨーロッパの近隣どうしでも最も成功した二国関係（として常に言及されもするの）はドイツとフランスの融和である。この場合は、両者が同じ力をもつ隣人であり（またく似ていない兄弟＞：参照, Chiva & Jeggle 1987, S.7）として相互に敬意を払っている。それに対してドイツとオランダやドイツとデンマークは今日にいたるまで、より問題をはらんだままのところがある。

28 これは、過去に強國・大國であった国についてもあてはまる。たとえば、かつて強大であったポーランドに対するリトアニアの関係がそれを示している（参照, Mucha 2000, S.226f.）。

II.

近代の国民国家を構成し、また国民を隣りの国民から区分するファクターは、通常、エスニシティ、言語、文化であり、それに宗教も加わることが多い。とは言え、隣人への関係を左右するのは、かかる（一見客観的な）差異ではなく、むしろ主観的に感得され、あるいは想像される他者イメージであり、また（ナショナルな政策モチーフによって）高められ、組み立てられ、演奏された差異である。外部の者にはまったく気づかないようなささいな（ときには取るに足らない）違い（たとえば特定の料理や服飾あるいはしぐさ）が、高度に意味深い、アイデンティティをつくりだす差異のメルクマールとして知覚され、思い入れがこめられる。たとえば、ヴォルブラハトヴァ (Volbrachtova 1988) がしめしたように、チェコ人とドイツ人の関係に強く影響したのは、いくつかの<ささいな違い>であり、それがたいそう重要かつ妨害的なものと受けとめられたのだった。同じことは、ドイツ人とオーストリア人のあいだの関係にもあてはまる。

隣接する民族の知覚における主観性は、特に個人や、システムとをもつ社会組織体、さらに学問が使っている種類の知識財によって表現される。隣りあう民族(国民)とは、たいてい永い（ふつうは緊張に富んだ）歴史的経験によって結ばれており、またその経験は、歴史的記憶に入りこんでいる。持ち伝えられた知識財であり、ヤン・アスマン (Jan Assmann 1988:10f.) によれば、それらの一部は集合記憶に、また一部は社会の息長い文化的記憶に沈みこんでいる。文化的記憶を特徴づけるのは、ある種の知の構造である。つまり、組織化されたコミュニケーションのなかで媒介され、<集団がそのまとまりや独自性の拠りどころにし、また（集団がアイデンティティを再生産する上で）形式的で基準的な力が関係してゆくところの> (Assmann 1998: 12) 知の構造である。そのさい、文化的記憶の本質的なメルクマールは、時間の地平が、幾世紀・幾千年を包含することもできる、限定されないものということにある。その限定されない時間のなかには固定した諸点が存する。つまり<過去の運命的なできごと>であり、また<その記憶は、文化の有形（テキスト、儀式、モニュメント）を通じて、あるいは制度化されたコミュニケーション（文書の読み上げ、儀典、省察）を通じてよびさまされる>（同）。かかる<回想される姿形>は、教育シス

テムやメディア、また口づたえの伝統によって呼びさまされるが、そうした姿形は、エスニック・ナショナルなまとまりや独自性の意識を構成するものでもある。なぜなら文化的記憶の対象が現れるのは、それらを自己と重なるものとすることによってであるが、それは一つには《これが私たちだ》というポジティブな側から、二つには《私たちはこれとは反対だ》というネガティブな側からである> (同 13)。言い換えると、そうした対象は、帰属と非帰属を区分する。私たちを隣人から区分し、それによってアイデンティティへの深い希求にかさなっている。＜私たちはこれを決して忘れることができない＞、とはナショナル・アイデンティティを構成する記憶であり、それゆえ政治家が安易に手を伸ばし戦術にしがちでもある(参照: Höpken 1996)。もちろん、決して忘れない、にも明らかな差異がある。永くつづく記憶、長大な時間をつらぬく記憶は、小さな隣人において特に強い。とりわけ隣人とのかかわりで自己が犠牲となったトラウマのような経験の記憶である。ポーランド人やチェコ人、また南東ヨーロッパの諸民族は、正にトラウマと化した歴史のあざやかな記憶を胸にかかえ、それをモニュメントや国民的な記念日や歴史教育や民間伝承としてよびさましている。

歴史的な記憶や知識が等しくないだけではない。隣り合う民族(国家)にかんする一般的な知識もまたそうである。そのさい、小さな隣人のあいだで、彼らにとっての強大な隣人をめぐる知識の多さは、その逆をはるかに超えている。

ポーランド人の毎日の生活のなかで隣人としてドイツがもつ意味は大きく、それはドイツ人にとってのポーランドの比ではない。ポーランド人がドイツの歴史や細かな情報に詳しいことと言えば、ドイツ人が顔を赤らめて黙るしかないほどである(Feldmann 2000: 109)。

もっともこの事実は、逆に小民族よりもさらに小さな隣人については、知識が乏しいことによって相対化されてしまう。小さな国々では、より小さな隣国への無関心がいちじるしく、それは特にバルカン半島における際立った特徴となっている。それについては、ある女性文化人類学者がこう

言い表したものである。

(バルカン半島では) すべての国々が背中あわせで同居している。

同じことは、バルト諸国のあいだでも、またポーランドとチェコ共和国のあいだでもみることができる²⁹。

数年前から、共通教科書のための専門委員会が、〈確実〉な史実の知識について一致した表現をめざしている(参照, Waskiewicz 1994; Höpken 1996)。同時に、それと並んで〈頭のなかの映像〉、つまり自己ステレオタイプや對他ステレオタイプ、それに歴史をめぐる神話にも大きな意味がある。なぜなら、たとえばシュタンツェルが豊富な事例によってしめしたように(Stanzel 1997)、歴史経験から知った近隣の諸民族については、数々のステレオタイプ・イメージ、つまり先入観や敵としてのイメージは、数世紀を通じて多数にのぼるからである。隣人のそうしたイメージがどれほどネガティブかつ深く錨をおろしているかは、ドイツ人やオーストリア人やチェコ人をめぐる展示でみられるカリカチュアが示している³⁰。それだけでなく、隣接する諸民族を言い当てる諺や言い回しや伝説やニックネームやウィットがふんだんであること、さらに最近の調査などからも確かめられる³¹。この点ではまた、より大きな隣国について、小さな国が明確なイメージをいだいていること、またそれが数多いことも挙げてもよいであろう。しかしステレオタイプ・イメージの研究がしめすように(cf. Roth 1998)、決定的なのは所与のイメージよりは、むしろ隣人・隣国との個人的あるいは社会的な付き合い、ならびに政治によってつくられた枠組みである³²。

隣接諸国の人間の交流は決して白紙ではじまるわけではない。ドイツと

29 ポーランドとチェコの関係についてのこの角度からの文献をなかなか見当たらないが、それ自体が特徴と言えるであろう。わずかにチェコ人のポーランド人像にかんする次の文献を挙げておきたい。参照, Mucha 2000, S.228.

30 S. Becher & Dzambo 1997.; チェコ人とドイツ人がたがいに相手についていづくイメージについては次を参照, Lenk 1997.; Dzambo 1997.

31 ポーランドの若者について行なわれた最近のアンケート調査として次を参照, Feldmann 2000, S. 46f.; また次も参照, Mucha 2000.; 同じく本書所収の次の論考を参照, Vaclav Houzicka.

32 ポーランドやチェコスロヴァキアの社会主義政権は、近隣民族どうしのネガティブなイメージをかき立てることにまわる既存の先入観を利用した面があった。これについては次の文献を参照, Dziegiel 1996; また本書所収の次の論考を参照, Dziegiel.

チェコ、ドイツとポーランド、ドイツとフランスなどの出会いでは、歴史が同じテーブルについているだけではない。たがいにいだいている数多くの観念や予想もそこには顔をみせることが普通である。もちろん、これは原理的には、あらゆるインター・カルチュラルな触れあいにもあてはまる。しかしそこで重くのしかかるのは、隣国どうしでは避けがたい＜歴史の重荷＞ではない。EUは、第二次世界大戦後、かつて敵対していた隣人が一つのまとまりとして＜宿敵＞関係の克服をめざして形成に向かったのだったが、今日では、むしろ新しいより困難な課題に直面している。西ヨーロッパの諸民族の場合、国家間・政治的な関係が土台になって、それが実際の人間と人間どうしの関係においてもポジティブな作用として定着してきた。その後、今日では、EUの東ヨーロッパへの拡大が見込まれるなかで、新たな深刻な課題が起きている。中部ヨーロッパの東域でも歴史の重荷をやわらげ、＜ふつうの＞隣人関係³³をいかにして構築するか、である。しかしこの課題は、ポスト社会主義の変革によって発生した危機もあって決して容易ではない。西側の隣人の優位のために、東西対立³⁴とルサンチマンが却って強まっている面がある。

III.

国民国家の近隣が思わしくなくなり勝ちである事実は、近隣との付き合い、また一般的に近隣諸国との付き合いへの疑問を新たにする。そのさい、社会的、また政治的行動との学問的営為の二つの水準に区分をしておきたい。前者に属するのは、近隣とのかかわりに焦点をあせるなら、そこではミクロの水準とマクロの水準のあいだに亀裂が見えてくるのは前者である。つまり国境地帯の人間のリアルな日常の振る舞いと、国民国家の政治との間にはきわめて頻繁に乖離がみとめられる。良好な共存、＜国境をまたぐささやかなやりとり＞というローカルで狭域的な方策の前に、区切りに重点をおく国民国家の構えが立ちはだかるのである。国民国家の水準では、近隣間の接触には、むしろ危険性の潜在ないしはリスクがひそんでいると見られるのに対し、国境地帯の住民たちは、近隣関係を有利ととら

33 参照, Woycicki 1999.; Svasek 2000, S.123.; また本書所収の次の論考を参照, Simonides.

34 参照, J.Roth 1999.; また本書所収の次の論考を参照, J.Roth.

え、自分たちの地域を国民国家間の橋渡しの場所や連結項とみなすことがある。そこは、交換や転移の場、二重の意味で〈移し替え〉の場所である。かかる対比的な利害の相関の例では、ドイツとチェコの国境をまたぐ頻繁で密接な現地の行き来に対して、ドイツとチェコの政府間の政策は遅々として進展しないことを挙げてよいであろう。またこれを素地にして、EUでは、国境地帯をいわゆる〈ユーロ・エリア〉(Euroregion)*として特定し、集中的に近隣の交友・交流を目指していることにも注目しておきたい。

これからの近隣関係をどう形作するのかをめぐる学問的な寄与では、政治学、社会学、歴史学とならんで、特にエスノ研究とインターカルチュラル・コミュニケーション研究が責務を負うことになる。おそらくフォルクスウンデは、ナショナル・アイデンティティの構築と隣人の排除によって〈役に立つ学問〉という役割を果たしてきたと言えるだろうが、その役割はすでに数十年前に放棄された。それは、ヨーロッパを枠組みとした諸文化の交差・交流を射程に置く視点のためでもある。しかし、現今の文化分析的なくヨーロッパ・エスノロジー>となっても、なおフォルクスウンデは、ほとんどの国々において、その中核では、物の見方や研究活動の実際では、なお驚くほどナショナルな性格を残している。つまり〈自分たち独自の>文化に焦点をあわせる習性³⁵がはたらいて、ヨーロッパの他の諸文化に本当に向き合うにはいたっていない³⁵。隣接する諸民族・諸国民のあいだの相互関係や相互影響や相互交流や摩擦を十分にはテーマとするまでにはなっていない。エーファ・フェルトマンの発言(Eva Feldmann 2000:109)によれば、ドイツにとっては、東に位置する隣人を、最終的に、これまで以上に意識的に、またより大きな関心をもって認識する時期に来ているとされるが、これはヨーロッパ・エスノロジーには特別の意味をもってあて

35 これは最新の『ヨーロッパ・エスノロジー入門』(Kaschuba 1999)にもあてはまる。ごく一般的に〈自分たちのもの〉と〈異なったもの〉のあいだの関係(S.102-107)やアイデンティティとエスニシティの構造(S.132-146)と言いながら他の、たとえば特に隣接諸国の文化には触れていないなど、疑義が避けられない。〈ヨーロッパ・エスノロジー〉という学問名称をめぐる(釈明めいた)議論(S.108-111)は姑く措くとしても、同書には実際のヨーロッパ的なパースペクティヴがまるで見られず、むしろ研究のフィールドをドイツ(語)の境界に>(S.108)に限ったままである。隣接する諸民族・諸文化の関係とインターアクション、またそれらの諸関係はインターアクションの歴史性と経験的な日常の実際、これがヨーロッパの社会文化と政治のダイナミズムに重要であるはずだが、カシューバの『ヨーロッパ・エスノロジー入門』ではカットされたままである。

はまる。この問題関心に関与することを通じて、ヨーロッパ・エスノロジーは、当然ながらインター・エスニシテイ研究と文化交流研究・ステレオタイプ研究・インターカルチュラル・コミュニケーションへの姿勢を拡大することになり、その赴くところ、これらの諸関係のより深い理解と、それによるインターエスニックな共存と＜よき近隣の政治＞に資するであろう（参照、Roth 1999a）。

とは言え、（文化研究と心理学と言語学とコミュニケーション研究のはざまに定着した）インターカルチュラル・コミュニケーションのこの新分野も、これまでは、異文化に属するメンバーのあいだの直接的コミュニケーションについて調査しながらも、近隣間のコンタクトに特定した研究を度外視していた面がある。この新分野は、USAの状況から出発して、一方では国内の多文化性（domestic arena）の諸問題を、他方では経済に比重をおいたグローバルなコンテクストにおけるインターアクション（international arena）に集中してきた。しかしヨーロッパの場合、国や言語や宗教や文化が入り組んでいるため、隣接する国々の人間どうしのインターアクションがきわめて大きな意義をもつ。そうしたインターアクションは、それまたそのときどきで大きな負荷をもっている。とりわけ、＜大国＞の人々と＜小国々＞の人々がたがいにパートナーとして交流する場合がそうである。種々の格差、特に歴史的な過去の体験、伝統的な見地、そして＜予言的中＞（self-fulfilling prophecies）というサイクルになることも少なくない。これを打破するのは容易ではなく。直接コミュニケーションの現場で誤解や衝突にいたることもめずらしくない。文化的に近い故に完全な平等であるべきと思ってしまうことも、問題を先鋭化させる。しかし、国境を形づくりアイデンティティをつくりあげる＜ささいな違い＞を粗さがしするのも、一方の＜優越者のふるまい＞とその＜身勝手＞を前にした他方の恐れの方を回避するための知恵という面もある。インターカルチュラル・コミュニケーションが近隣関係の問題性を特別視のこともあり得るが、それは、（アメリカの文化人類学の刺激と1970, 80年代の＜アジアの挑戦＞という条件の下で形成された）インターカルチュラル・コミュニケーション研究が、その対象として＜すべての他者＞との出遭いに集中する姿勢を一貫してつよめてきたという限りにおいてである。加えて、じかの接触にお

けることと今に焦点を合わせるあまり、具体的交流の歴史的次元とその前史をマクロの視点からみるのをおさなりにしてきた面もある。

かかる背景として、本書の諸論考がめざすのは、近隣の問題性を文化研究の観点から分析するアプローチである。たとえば、チェコ人とポーランド人とドイツ人の関係、その近隣性のネットワークであり、そこでは数世紀にわたって、ヨーロッパの他の民族グループ間ではみられなかったような悲痛な経験がみられると同時に、実り豊かな互いの行き来と対話にも満ちている。ドイツ人とチェコ人とポーランド人の近隣関係は過去も現在も、空間のどの方面にも向けておこなわれており、それはまた住民としての隣人関係から国家としての隣国関係にまで延びている。ローカルな水準での直接的な近隣性と相互交流は、家族や職場の文脈もふくめて、特にノルベルト・キュルス、ユリアナ・ロート、ミエチスワフ・トロヤン、ピョートル・スヴァトコフスキーが取り上げている。他方、ハイケ・ミュンス、カタリーナ・アイシュ、イェルク・スクリーベルト、それにマフゴルザータ・ミヒャルスカは、国境地域の近隣関係をテーマとしている。他の諸論考では、一つには三種類の民族・文化の近隣をめぐる歴史と現在が考察の中心に位置し (Esther-Beate Körber, Leszek Dziegiel und Dorota Simonides)、二つには自己とよそものの認識を個々人と民族について細部にわたって追及されている (Vaclav Houzvicka, Petr Lozoviuk, Jana Pospisilova, Tobias Weger und Norbert Cyrus) いる。

訳注：

p.301 民族詩心 (Volkspoesie 民衆詩歌)：“Poesie”は詩歌の集合を意味する。従って“Volkspoesie”は民衆・民族・国民・庶民的な詩歌の全体の意味になるが、それは文壇的な作品とは別の原理によるとの観点からは、そこには固有の力や心意がはたらいっているという理解になるため、民族/民衆詩心といった意味を読むと文脈に合うことが多い。

p.301 村の隣人組 (Dorfnachbarschaft)：“Nachbarschaft” (英Neighborhood) は歴史的には、一般的な近隣ではなく、町村体の運営や特定の課題を共同で行なうにかかわる組織であった。それゆえ“Nachbar”は一定の資格と資産をもち町村体の正規の構成員となる市民や農民と同義のこともあり、そうした共同責任のグループが隣人組であった。また井戸の共同管理に責任を負う<井戸組合> (Brunnennachbarschaft) のような語法も一般的であった。隣人 (Nachbar

/neighbor) が今日の意味での不特定の隣人を指し、また隣人組 (Nachbarschaft / Neighborhood) も法的な意味合いが薄れて広く使われるようになるのは18世紀末頃からであった。

p.302 ヴィル＝エーリヒ・ポイカート・・・『隣人 ― 比較民俗学誌』 (*Der Nachbar. Jahrbuch für vergleichende Volkskunde*): ポイカート (Will-Erich Peuckert 1895-1969) はゲッティンゲン大学教授で、第二次世界大戦後のドイツ民俗学の再建にあたった中心人物の一人。現在はポーランド領となっているシレジアの出身 (生地はTöppendorf, Kr.Goldberg-Haynau) であったが、若い頃から社会批判の姿勢を培い、社会民主党左派に共鳴していた。比較的初期の著作『プロレタリアートの民俗学』 (*Volkskunde der Proletariat* 1931) は、シレジアの亜麻栽培農民と職工の悲惨な境遇をとりあげた意欲作であった。そうした姿勢、また出身地が民族混合地域であり、さらに第二次世界大戦の国境線の変更による諸問題に取り組むためにその雑誌名を掲げたが、当時の民俗学の方法論では限界があり、ポイカート自身もやがて現実問題から遠ざかった。

p.307 ボスニアの戦乱: ボスニア＝ヘルツェゴビナはもとは、ユーゴ直印の一国で面積51km、人口376万人(2008年)。ユーゴ連邦の建国者で終身大統領であったチトー (Josip Broz Tito 1892-1980) の没後の混迷のなか、ボスニア人などの政府は、政府は、1991年10月、政府はユーゴからの独立を宣言したが、優勢を強めつつあったセルビア人はこれに反対し、翌1992年2月の独立を問う住民投票をボイコットしたため形式的には賛成が圧倒的となりECも承認し、同年5月に独立した。この時点の住民構成は、セルビア人33%、クロアチア人17%、ボシュニャク人 (ムスリム) 44%であった。セルビア人は分離を目ざし、以後3年半内戦となり、ECやNATO軍の介入もあり紆余曲折を経てクリントン米大統領の調停の下、1995年12月14日にアメリカのデイトン空軍基地において関係者が平和協定に仮調印して43カ月にわたる内戦は終息した。結果は、国内の面積比率ではボスニア・ヘルツェゴビナ連邦が約51%、セルビア人のスルブスカ共和国が約49%となり、強制移住や狭域での住み分けが強化され、また各共和国が警察と軍隊をもつこととなった。内戦の過程では、いわゆる民族浄化と総称される各種の残虐行為や非人道的な事件が組織的に行なわれたことでも知られる。

p.307 コソボ紛争: コソボは、元は旧ユーゴスラヴィアのセルビア共和国に属する自治州で、現在の人口は約180万人、その大半はアルバニア人でムスリムである。しかし自治州の境界と民族分布は一致していず、セルビア人も併存していた。両民族の軋轢は根深く複雑であるが、1990年にセルビアのミロジェヴィッチ大統領がコソボのセルビア化を進め、アルバニア語の公用語からの追放や同語による新聞の発行禁止、職場や学校でのセルビア化を強行した。これに反撥したアルバニア人が1991年に並行議会によって独立宣言をおこな

い、それ自体は国際社会にはみとめられなかったが、それへの弾圧に対してアルバニア人の武装勢力の活動が活発化した。特に抑圧を強めるセルビア治安部隊に対して1996年からアルバニア人のゲリラ的な襲撃が頻発し、彼らは各国に居住するいわば〈ディアスポラ〉から資金や武器の援助をうけていた。当初アメリカは、彼らをテロリストに分類していたが、必ずしも徹底せず、またセルビアの強硬姿勢への反撥もあって、EUとアメリカはコソボ独立の動きを容認する方向へ傾いた。その間もセルビアによる住民虐殺（特に1999年1月15日のラチャクの虐殺）や、他方アルバニア人によるギリシア正教の文化財級の教会堂の破壊や聖職者の殺傷が起きるなど、双方の応酬はエスカレートした。1999年3月にコソボをユーゴの自治州としてNATOの統治下におくとするランプイエ合意がなりたったが、セルビアとロシアは反対して振り出しに戻り、セルビアの軍事侵攻に対して以後NATO軍の3万8千回もの空爆を行ない、その過程ではベオグラードの中国大使館への誤爆事件（1999年5月7日）も起きた。1999年6月に事態は鎮静に向かい、翌年2000年にはセルビア軍は撤退した。その後2008年にコソボは独立を宣言し、日本を含む約50カ国が承認しているが、ロシアが未承認であるほか、自国に民族問題をかかえるスペインやキプロス、ルーマニアなどは態度を保留している。

p.308 地名の茶化し(Ortsneckerei)：地名の由来を面白おかしく説いたり、地名にまつわる特有のエピソードでその土地の人間の特質、とりわけ欠点をあげつらう話類で、口承文芸の一種でもある。土地のニックネームのドイツ語について例を挙げると、バイエルン人のゼップル(*Seppel*)、ダルムシュタット市民を指すハイナー(*Heiner* <Heinrich>)、土地が砂地であることに困むニーダー追ったバッハの人々を指すく砂兎 *Niederotterbacher Sandhasen*>、生業に困むヒューゲンハイムの人々を指さすく鋸研ぎ *Hügenheimer Scherenschleifer*>、身体的特徴を言い立てるオーブリヒハイム市民のく瘤のある奴 *Obrigheimer Kröpfer*>、精神面に焦点を併せたドッセンハイム市民のくうすのろ *Dossenheimer Dappes* = *Tölpel*>、食生活に困むラーデンプルク市民のく蛙を食う連中 *Ladenburger Froschenkelfresser*>等、村や村中の地域についても言われることもあり、豊富かつ多彩である。

p.308 部族(Stämme)：ドイツでは、古ゲルマン時代の部族区分(シュヴァーベン人、ザクセン人など)が近代にも作用しているとの観念が有力であった。実際には、それらは古くからの要素の延命ではなく、シュヴァーベン人のようにそのイメージが中世末から近代初期に形成されたものであったり、ザクセン人のように、さらに遅い時期に固定したものであることがほとんどである。またバイエルン族のように大きな枠組みでは、さらに細かく、高地バイエルン人と低地バイエルン人、フランケン族などのように分かれることもある。いずれも古い歴史に根ざすものではなく、後世になって理解の便や特殊視のために形成された先入観であるが、ロマン主義思潮のゲルマン回帰の風

潮では過度に強調され、民俗学でも部族伝統による分類が風潮となった。

p.309 シレジア (Schlesien): シレジアの大部分は今日のポーランドの南西部で、僅かにチェコ、そしてさらにドイツ東部の小地域を含む。古く13世紀のモンゴル軍との戦いでヨーロッパ連合軍の総大将であったシレジア公が戦死して荒廃し、その後鉱山開発もあってヨーロッパ各地から入植が起き、特にドイツ人が多く移住した。中世以後はオーストリア帝国に属したが、マリア・テレジアの即位の承認と引き換えにプロイセンが一方的に侵攻し七年戦争の係争地となった後、プロイセン領となり、ドイツ帝国に引き継がれた。しかし住民の増加はポーランド人が勝っており、1910年頃には70%がポーランド人であった。しかし第一次世界大戦後の住民投票では都市部のポーランド人の多くが既存のシステムを選択したためドイツ領となった。しかしナチス・ドイツの下でポーランド系住民への迫害が激化し、両民族の対立が深まり、ドイツの敗戦後、特にスターリンの強い意向でポーランド領となり、ドイツ人のほとんどポーランド国籍とポーランド語を拒否して同地を追われた。伝統的にドイツ人が建設した都市のほか、農地も居住地も数百年来の定住地であるため、追放されたドイツ人の不満と復帰志向は強く、ドイツ・ポーランド関係の改善の足かせになった。1970年代のプラント外交によるドイツの譲歩によって問題はほとんど解決したが、最終的な決着は東西ドイツの統一後まで持ち越した。

p.309 ジーベンビュルゲン (Siebenbürgen): ジーベンビュルゲンは現在のルーマニア北西部のトランシルヴァニア (Transylvania)、一部で隣接するハンガリーを含む地域を指すドイツ語名。同地方の住民は歴史的にもルーマニア人が多数であるが、同時にかなり多数のハンガリー人とドイツ人が住んできた。ジーベンビュルゲンは文字面から<七つ城>との俗解が広まり、一部で紋章の図案にもなったが、シビウ市 (Sibiu独Hermannstadt) に由来する。同市はドイツ人入植者によって発展した経緯をもつ。

p.317 ユーロ・エリア (Euroregio/ Euroregion / Europaregion / EUREGIO): 主に国境地帯を対象に、境界をまたいだ地域を一体・一連のものとしてとらえ交流を促進しようとする政策で指定された地域。1958年の西ドイツ・オランダの国境沿い地域にその政策が導入されたことに始まる。EU次元の政策が本格化する段階になると、1992年のドイツ・ポーランド・チェコ間の“Neisse-Euroregion”以後、独仏国境や、ドイツとスイスのボーデン湖をはさんだ地域や、さらに近年では、オーストリアとスロヴェニアにまたがる地域など数十カ所が指定され、またそれらの地域に国際的な施設を積極的に設ける政策がとられている。ヨーロッパ議会をストラスブールに配置し、またドイツ・ポーランド国境のナイセ河畔フランフルトにEU大学が設立されたのもそうした政策による。